

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語における切断現象と使用頻度
Author(s)	上野, 貴史
Citation	ニダバ , 22 : 103 - 111
Issue Date	1993-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044350
Right	
Relation	



イタリア語における切断現象と使用頻度

上野 貴史

0. はじめに

音韻の増大または脱落という現象は、様々な言語においてしばしば起こるものである。イタリア語においても、語末の音韻が脱落する現象の代表的なものとして、troncamento と elisione¹⁾ を挙げることができる。現代イタリア語では、troncamento は歴史の変遷の過程で一部のみが固定化したがる、ほとんどが任意に起こる現象となっている。また、elisione は二つの語にまたがる母音重複を避けるために現代イタリア語においては、ほとんどが規則的に使用されている。これらの切断現象²⁾ に対して、一般的な現代イタリア語の文法書では音韻的な側面³⁾ から説明・考察が加えられるのが通例である。このような考察に対して、従来の研究には使用頻度という観点からの分析が欠如しているとして、音韻的な側面からではなく使用頻度ということを主眼として切断現象を考察したものに Mańczak(1978) がある。この中で彼は troncamento 及び elisione の起こっている形態とその使用頻度との関係を Pirandello のデータを基にして考察し、切断現象は使用頻度と深く関係しているということを述べている。しかし、筆者が収集した Leopardi⁴⁾ のデータには、この分析に適用しない事象が出てきている。

そこで本稿では、Leopardi⁵⁾ の散文作品から収集したデータに基づいて使用頻度と切断現象の関係を検証しその問題点を言及し、さらにその他の観点からこれらの切断現象を考察することにする。

1. Mańczak(1978) の検証

Mańczak(1978) では、切断現象が使用頻度と深く関係しているということを以下の4つの点から論述している。すなわち、(1) troncamento や elisione の起こる語彙は頻度辞典の主要 1000 語の中に入る高頻度語彙である (2) ラテン語の同語源から生じた2つの語彙では頻度の高い方に切断現象が起こる (3) ラテン語で異なる語源から生じた類似形態では頻度の高い語彙に切断現象が起こる (4) 同じ語彙ではより密接度が高く頻度の高い語彙結合に切断現象が起こる、ということ Pirandello の作品から用例を収集し分析を試みている。しかし、筆者の収集したデータの中には、彼が述べているような使用頻度

の高さが切断現象の主たる要因であるという考察と適応しないものがある。それに関して次に考察してみる。

1.1. 一つの語彙に複数品詞がある場合

Mańczak(1978)では、「同ラテン語語源の語彙では、より使用頻度の高い品詞の方に切断現象が起こる」として以下の例を挙げている<表1>。

<表1>

	冠詞	数詞
uno	4	5
un	60	-
	関係代名詞	名詞
cosa	13	4
cos'	7	-
	形容詞	副詞
poco	1	2
po'	13	-

これらのデータから彼は1列目の品詞(冠詞・関係代名詞・形容詞)の使用頻度が高いために、1列目の品詞の使用の場合に切断現象を伴う形態が出現していると説明している。しかし、筆者が収集したデータでは、<表2>の *ciascuno* と *mezzo* のようにこの説明に適応しないものが見られる。<表2>では、両例とも使用頻度の低い形容詞形に切断現象が起こっており、使用頻度の高い代名詞・名詞形には切断現象が全く起こっていない。このことから切断現象が起こる要因としては、この場合使用頻度が関係するのではないということが理解できる。<表1>と<表2>における異なる結果に対しては、筆者はそれぞれの品詞の機能に切断現象の要因があると考えているのであるが、この点については3.で考察することにする。

<表 2>

形容詞 [⊗]		代名詞
ciascuno	9	43
ciascun	8	1
ciascun'	1	-
形容詞 [⊗]		名詞
mezzo	10	39
mezz'	2	-

1.2. 密接度

Mańczak(1978)では、「より密接度の高い(使用頻度の高い)統語連続の場合に切断現象が起こりやすい」と記述しており、その例として loro の例を挙げている⁷⁾。しかし、これに関しても筆者の収集したデータでは、異なる結果が出ている。そのことを指摘するため、amore と結合している用例[⊗]の中で複数個出現したものを示す。

amor proprio 9
 amore di[⊗] 8
 amore che 8
 amore e^{1⊗} 6
 amor di[⊗] 3
 amor grande 2
 amore non 2

この amore の例では、使用頻度の高い統語連続である amor proprio と amor di の結合の場合は実際に troncamiento が起こっているが、続いて使用頻度の高い amore che の連続の場合は全く troncamiento が起こっていない。また、それほど使用頻度の高くない amor grande という場合には、troncamiento が出現例全てに起こっている。このデータからも使用頻度のみが troncamiento の要因であるとは考え難いことが分かる。

以上のように、Mańczak(1978)で述べられているような切断現象と使用頻度の密接な関

係に対して、筆者が収集したデータにはかなりの例外が見られる。しかしながら、上野(1992)でも指摘しているように使用頻度もしくは密接度と切断現象の関係は、かなり深いと考えられる。そこで次に、さらに詳しく使用頻度と切断現象の関係を考察してみることにする。

2. 切断現象と使用頻度

収集したデータの中には、切断現象が起こっている例が 1327 例見られた。そこでそれ

<表3>

elisione

頻度順位	頻度数	%
1-1000	453	98.1
1001-2000	9	1.9
2001-3000	-	-
3001-	-	-

頻度順位	異なり語数	%
1-1000	32	94.1
1001-2000	2	5.9
2001-3000	-	-
3001-	-	-

<表4>

troncamento

頻度順位	頻度数	%
1-1000	812	93.9
1001-2000	24	2.8
2001-3000	12	1.4
3001-	17	2.0

頻度順位	異なり語数	%
1-1000	89	70.6
1001-2000	14	11.1
2001-3000	10	7.9
3001-	13	10.3

それぞれの語彙¹¹⁾の頻度順位を検討するために、イタリア語の頻度辞典である *Lessico di Frequenza della Lingua Italiana Contemporanea* でその頻度順位の調査を行った¹²⁾ <表3><表4>。これらの表から、*elisione*, *troncamento* が起こる語彙が、高頻度語彙であることが理解できる。特に *elisione* の起こる語彙は上位 1000 語以内の語彙が 9 割を越え、高頻度語彙に切断現象が起こるといふ一つの証拠を提供するものと考えられる。これは Mańczak(1978) での Pirandello の作品中に起こった切断現象の語彙をフランス語の語彙に当てはめて調査した結果¹³⁾ とほとんど一致することである。一般的に高頻度語彙は基本的な語彙、もしくはその調査対象の特徴的な語彙であるとされる。本調査の場合は本稿で使用した頻度辞典が示すように、切断現象はより基本的な語彙に起こると考えて良いと思われる。しかしながら、1. での検証、また<表4>における使用頻度が 2001 番以上の語彙の切断例の頻度を考慮に入れると、使用頻度のみが切断現象を起こしている要因とは断言できないであろう。そこで 1.1. での使用頻度の低い語彙の切断例、1.2. での使用頻度の高い統語結合の切断例、そしてここで述べた 2001 番以上の語彙の切断例を説明するために、本稿では音韻的な要因と機能的な要因¹⁴⁾ を取り上げ次に考察することにする。

3. 音韻的・機能的要因

まず切断現象が起こる要因を音韻的な側面から考察するために、使用頻度の低い 2001

<表5>

直前の音韻 直後の音韻	/r/ (%)	/l/ (%)	/n/ (%)	合計 (%)
pausa ¹⁵⁾	-	-	33.3	3.5
/e/	-	40.0	-	6.9
/o/	4.8	-	-	3.5
/p/	9.5	-	-	6.9
/t/	9.5	-	-	6.9
/k/	19.1	40.0	33.3	24.1
/d/	9.5	-	33.3	10.3
/f/	-	20.0	-	3.5
/s/	9.5	-	-	6.9
/l/	33.3	-	-	24.1
/m/	4.8	-	-	3.5

番以上の語の次に連続する語頭音の調査を行った<表5>。<表5>から分かるように、troncamento されている語に後続する語頭音は、破裂音と流音が圧倒的に多い。このことは上野(1992)で指摘した動詞の troncamento の分析と同じ傾向を示している。すなわち、使用頻度の低い語彙においても、音の階層¹⁰⁾における最も高い破裂音か低い流音に連続する場合に troncamento が多く起こっているという傾向を示している。このようなことを考えると、troncamento が起こりやすい、または起こりにくい状況は後続する語頭音に深く関係していることが指摘できると思われる。

最後に切断現象の機能的要因を分析するために、切断現象が起こっている語の品詞の分布を調査してみた<表6>。

<表6>

品 詞	troncamento (%)	elisione (%)	合計 (%)
形容詞	44.7	28.8	42.8
動 詞	37.4	3.4	33.4
副 詞	9.1	3.4	8.4
名 詞	4.7	27.1	7.4
接続詞	2.3	33.9	6.0
前置詞	1.9	3.4	2.1

この使用頻度から分かるように、特に troncamento に関しては形容詞と動詞の頻度が高い。これは形容詞に関して言えば、名詞を前から修飾する場合に切断現象が起こっている。この形容詞の中には、日常頻繁に使用される品質形容詞 (buon, bel, bell', gran, 等)、所有形容詞 (lor)、数形容詞 (quarant', cinquant', vent')、不定形容詞 (alcun, tal, ciascun, nessun, ogn', tutt', 等)があり、いずれも名詞との密接度が非常に高い語彙である。このように形容詞は、名詞との結合が密接なために頻繁に切断現象が起こっていると考えられる。また、動詞に関しては、統語的に動詞句の中心である動詞が直接補語をとる場合、または助動詞・準動詞として出現する場合に頻繁に切断現象が起こっている。この動詞の例としては *per dir così*, *far giudizio*, *finir la vita*, *dover essere*, *aver goduto*, 等が挙げられる。逆に、名詞・接続詞・前置詞といった品詞には切断現象は起こり難く、品詞のそれぞれの機能にこの現象は大きく依存していると考えられる。このことにより、1.1. で取り上げた *ciascuno* と *mezzo* の例で使用頻度が低い形容詞に切断現象が起こっている理由が説明できる訳である。

このように切断現象というものは、様々な要因が相関してその起こりやすい条件が決定されていると考えられる。もちろん、その中には語彙の使用頻度という重要な要素も入っているが、その他にも音韻的、機能的、または形態的な条件¹⁷⁾にも左右されて切断現象は起こると考えられる。

4. 結語

切断現象が起こるための中心的要因として使用頻度をあげている Mańczak(1978)の分析に対して、本稿では Leopardi を言語材料として切断現象の検証・考察を試みた。Leopardi からデータを収集するという理由には、現代イタリア語では切断現象が衰退していると言われている中でまだかなりの任意の切断現象のデータを収集できたこと、またこの現象が頻繁に起こっていた時代の言語材料を用いることなしではこの現象を正確に捉えられないと思われたからである。

本稿では、このようなデータから考察した結果、以下のことが指摘できる。

(a) 切断現象が起こる要因として使用頻度は深く関係していると思われるが、使用頻度だけがこの現象を起こす要因ではない。

(b) *elisione* は、高頻度語彙で頻度順位 2000 番以内の語彙に限られている。

(c) *troncamento* は、後続する語頭音が大きな要因となる。

(d) 切断現象は形容詞・動詞に起こりやすい。これは、その品詞の機能と深く関係している。

(e) 切断現象は、使用頻度とその語彙の音韻的・形態的・機能的な要因が相関して起こる。

以上、イタリア語における切断現象について考察してきたが、この現象は語末の音韻の脱落の一現象ではあるが、例えばイタリア語の副詞の語形成¹⁸⁾にも関連する現象であると考えられる。また、イタリア語に限らず英語の口語体に見られるような語中音の脱落¹⁹⁾にも関連する現象であると思われる。このような切断現象を従来のような音韻的な側面からではなく、非音韻的な側面からも考察することは、これらの現象を正確に把握するためには大変重要なことだと思えるのである。

註

1) *troncamento* と *elisione* の定義は、学者によって様々異なるが、本稿では Fogarasi(1983:78) に基づいて区別する。"Nel *troncamento* cade l'ultima vocale o sillaba della prima parola polisillaba che deve così terminare però con una delle seguenti consonanti; l, r, n, m" "nell'*elisione* le consonanti finali possono essere anche diverse e fanno sillaba solo

insieme con la vocale iniziale della seconda parola”

- 2) 一般的には *troncamento* は「切断」、*elisione* は「省略」として扱われるが本稿ではこれらの二つの現象を総称して切断現象と呼ぶ。
- 3) *troncamento* に関しては語末母音の直前の音韻・切断される音韻等、また *elisione* に関しては連続する語の語頭音等の音韻的な側面から一般的に記述されている。
- 4) Leopardi, Giacomo. 1984. *Opere*, a cura di Mario Fubini. Classici Utet.
- 5) 註 4) の文献中の散文作品の *Operette Morali* と *Pensieri* の全文からデータを収集した。
- 6) この表で収集した形容詞形のデータには、語尾変化の変化形も含んでいる。
- 7) Mańczak(1978) では、“lor signori 8, loro nomi 1, loro biglietti 1, loro quattro 1, loro e 1, loro in 1, loro fascino 1” となっており、最も使用頻度の高い *lor signori* に切断現象が起こっていると分析している。
- 8) *amore* の後に休止符 [. ,] が連続する例が 13 例見られたが、切断現象の起こっているものは全く見られなかった。
- 9) この中には、*di* の冠詞前置詞の例も含めている。
- 10) この中には、好調音字 *d* のついた *ed* の例も含めている。
- 11) これらの表の中には、頻繁に出現する冠詞・冠詞前置詞・指示代名詞・指示形容詞の切断例は除外した。
- 12) 古体として頻度順位が不明なものとして *niun, cotal, cangiar, gittar, verun, sofferir* 等が見られる。
- 13) Mańczak(1978) では、Eaton, H. S. 1961. *An English-French-German-Spanish Word Frequency Dictionary*. New York. を使用している。
- 14) 筆者は切断現象の要因として、音韻的・形態的・統語的側面を考えている。詳しくは、上野(1992) 参照。
- 15) 休止符 [. ,] の前での *troncamento* を示す。
- 16) Hawkins(1984:66) 参照。
- 17) 形態的側面については、上野(1992) 参照。
- 18) イタリア語の副詞は、形容詞の接尾辞 *-le, -re* の語末母音を省略して副詞接尾辞 *-mente* を結合させる。この語形成の過程には、切断現象と同様の要因が関係していると考えられる。
- 19) 特に英語の口語体では、強勢音節の後に共鳴子音が連続する場合に母音が脱落する。例、*happening - happ'ning*。

参考文献

- Bortolini, U., C. Tagliavini, & A. Zampoli. 1972. *Lessico di Frequenza della Lingua Italiana Contemporanea*. Garzanti.
- Cepellini, Vincenzo. 1990. *Dizionario Grammaticale*. De Agostini.
- Fogarasi, Miklós. 1983. *Grammatica Italiana del Novecento*. Bulzoni Editore.
- Hawkins, Peter. 1984. *Introducing Phonology*. Hutchinson.
- Leone, Alfonso. 1963. *Elisione e Troncamento*. *Lingua Nostra* 24.
- Lepschy, Anna Laura & Giulio Lepschy. 1984. *La Lingua Italiana*. Bompiani.
- Mańczak, Witold. 1978. *Correlazioni tra Forme Tronche e Elisie e loro Frequenze nell'uso*. *Lingua Nostra* 39.
- Schane, Sanford A. 1973. *Generative Phonology*. Prentice-Hall.
- Serianni, Luca. 1988. *Grammatica Italiana*. Utet.
- Trabalza, C. & E. Allodoli. 1955. *La Grammatica degli italiani*.
- 上野貴史. 1992. 「イタリア語の語尾切断現象(1)」大阪女子短期大学紀要第17号。